発問例

●二三四ページ

問 **「青が消えた」（1行目）ときの描写から、「僕」のどのような様子が読み取れるか。**

答 唐突な出来事に、とまどう様子。

補 バッテリーあがりやオーケストラの中断という比喩表現から、「青が消えた」ことが唐突さや意外性を感じさせるような現象として強調されていることに着目する。

問 **「居心地の悪い沈黙」（5行目）とは、どういうことか。**

答 してはならないことやあってはならないことが出現したような、その場での片付けようのない違和感が漂っているような感覚。

●二三五ページ

問◉ **「とりとめのない白」（3行目）とは、どういうことか。**

答 「僕」のとまどいを表現しており、色として明確な感じがなく、色抜けや脱色で色が無くなった状態の白、ということ。

問◉ **「歳月に洗われた見知らぬ人の骨のような白」（12行目）という表現には、どのような心情が込められているか。**

答 「僕」のとまどいや違和感や喪失感。

補 眼前の事態にまったく対処が出来ないような、困惑している「僕」の心理状態を表現している。ここで目にしている白は、「僕」にとってよそよそしい対象でしかない。

問 **「僕」がハワイ旅行のときの写真を確認しようとしたのはなぜか。**

答 ハワイの青い海が印象的だったこともあり、また、「僕」にとって大きな存在であったガールフレンドとの記念写真だったから。

●二三六ページ

問 **「まるでシベリアの氷原のような茫漠とした白い広野」（2行目）という比喩は、どのような効果を持つか。**

答 常夏のハワイの海とは対照的な「シベリアの氷原」という風景を用いた比喩表現によって、幸福な「僕」の過去の思い出が、わけもなく消し去られてしまったことへのむなしさを想起させる。

問 **「僕」が「ひとりぼっち」（5行目）だったのはなぜか。**

答 少し前にガールフレンドと喧嘩別れをしていたためにものすごく落ち込んでいて、パーティーに行く気にもなれなかったから。

問◉ **「くだらない。」（13行目）という「僕」の気持ちの原因は、どのようなものか。**

答 少し前にガールフレンドと喧嘩別れをしてしまったことに落ち込み、新しいミレニアムの到来を祝おうとしている世の中の雰囲気になじめないでいる。

語句の研究

●二三四ページ

3 バッテリーがあがってしまったときみたいに。　ここから6行目にかけて、「…みたいに。」が二回、「…という風に。」が一回使われ、主人公の目の前から青が消えていくプロセスが、比喩表現を効果的に使って叙述されている。ここでの比喩は直喩（明喩）として捉えられる。

キー・ポイント　直喩表現の特質　直喩はその表現が比喩であることを明示する語句を伴っているが、そうした語句を伴わないものが隠喩（暗喩）だとされている。確かに、見た目の差異はそういうことになるが、比喩表現の成立のしかたから見ると、根本的な差異が認められる。「リンゴのほっぺ」という隠喩が了解されるためには「リンゴ」が赤い色をしているという知識が前提になる必要がある。つまり、隠喩においては、比喩の対象と例えるものとの類似性が前提になっていてはじめて効果を持つ。それに対して、「…のような」という直喩は、比喩の対象とそれを例えるものとの類似性が表現者の創意にゆだねられている。だから、直喩表現はすぐれて創作性、独創性に富むことになる。作家独自の表現描写のセ

ンスが直接的に表れるところだと言うことができよう。

●二三五ページ

1 もう青は存在しなかった。　初めは目がおかしくなったと思った「僕」だが、明るい部屋で、落ち着いた状態で、もう一度確認したとき、この現象は自分の精神的なものによるのではなく、外界の存在にかかわる変化だと捉えたわけである。

3 棍棒で殴られて記憶を失ってしまったような　ここでも独特な直喩表現が使用されている。暴力的な場面を想起してしまい、かなり強烈な印象があるが、それだけのショックを感じている状態を提示していることになる。「とりとめのない白」に変わってしまったという箇所も、記憶喪失のうつろなイメージを喚起して効果的である。

8 僕は青という色が昔から好きだったし　ここで青についての「僕」の心情が表現される。「昔から好きだった」ということを押さえておきたい。

キー・ポイント　好きという心情　好きな色という表現は最終部分でゴシック体によって強調されるが、ここでまずは表明されていることに注意する。好きだったものが消失してしまうということへの想像力を喚起させたい。

15 僕とガールフレンドが、水着姿で海岸に寝ころんでいる写真が沢山入っているはずだった。　クローゼットの青い衣服を確認した次に、青で思い浮かんだのが彼女とのハワイ旅行での記念写真だったというのは、ハワイの青が印象的だったこともちろん、そこに彼女がセットになっている点に注意したい。これらの写真は彼女の思い出として大切な物であったろう。

●二三六ページ

2 シベリアの氷原のような茫漠とした白い広野だった。　彼女と写した記念写真の中からも青はすべて消えている。しかし、この直喩表現を深読みすれば、このページ後半で明らかにされる彼女との関係、すなわち、現在は喧嘩別れしてしまっていることへの示唆、暗示と言えなくもない。しかし、写真を捨てるようなことをせず、青という色ですぐ思い出されるように、「僕」にとって彼女との思い出は重要な記憶である。

5 僕はひとりぼっちだった。　ここでまた青が消える直前の時間に戻ってゆく。「僕」が一九九九年の大晦日の夜に、なぜひとり部屋でアイロンかけなどしていたのか。その事情が語られている。「世界中の人間はひとり残らずどこかのパーティーにでかけていた」という周囲の祝祭的なムードは、「僕」の孤独感をより際立たせている。もちろんその原因は彼女との喧嘩別れにあった。「ものすごく落ち込んでいた」とあるように、その時点で既に周囲からの疎外感、違和感に埋没している状況が読み取れる。その心的状況下で青は消えていったのである。つまり、「僕」にとって失われたものは、彼女の存在と青である。ここでは、彼女と青の近接性を押さえておきたい。

注意する語句

（＊で用例を示した）

名残惜しい…過ぎ去る物事や人物との別れが辛く、心残りである。
＊行く春が名残惜しい。

とりとめのない…まとまりがない。はっきりしない。
＊とりとめのない話を続ける。

茫漠…広くてとりとめのないさま。ぼうっとしてはっきりしないさま。
＊どこまで行っても茫漠とした原野が続いているだけだった。